

# 米海軍岩国診療所見学を実施しました！

## 実施概要

- 1 趣 旨 臨床研修医が海外医療機関の診療状況等を学ぶ良い機会となることから、臨床研修の一環として実施
- 2 見 学 先 米海軍岩国診療所（岩国市三角町 米国海兵隊岩国基地内）
- 3 実施期間 令和7年11月19日（水）、12月4日（木）、12月11日（木）
- 4 参加者数 16名（1年次研修医：15名、歯科医師1名）

## 【米海軍岩国診療所見学 研修レポートから（抜粋）】

・米海軍岩国診療所見学では主に3つのことを学んだ。①診療における患者への対応の丁寧さである。医師が患者の声に耳を傾けながら、時間をかけて診療していることが印象に残った。②英語、特に医療英語の重要性である。自分の伝えたいことを言葉にすることができるようトレーニングしておきたい。③米軍基地内における診療所の役割についてである。プライマリケアの役割が大きく、緊急疾患が疑われる場合には近くの総合病院、場合によっては当院に搬送されることもあり、日常診療から緊急性の判断まで幅広い対応が求められていると感じた。

・診療所と高度医療が可能な医療機関とは、双方の円滑な連携が不可欠である。現地に赴き診療所を見学させていただいて、いろいろ深く考えさせられた。

・Nurse Practitioner (NP) の制度を初めて見学し、プライマリケアを担っていることがわかった。また、診療所が基地内唯一の医療施設として機能していることを実感した。限られた環境の中で医療を提供する難しさや工夫を感じ、異文化の医療現場に触れる貴重な経験となった。

・矯正歯科では、ヘッドギアの指示通りの使用や自身のセルフケアを怠らないことなど診療を進めていくうえで必ず守ることを説明・同意する文書が印象的だった。今回の研修は、今後留学を考えている私にとってとても興味深いものだった。基本的には、歯科治療の内容は一緒であったが、異なる点もあったため日本のやり方だけを学ぶのではなく、世界水準で歯科の知識や技術を高めていく姿勢を持ちたいと感じた。

・産科の病室は、個室内で全てが完結できる作りになっていることが印象的だった。シャワーやトイレはもちろん、付き添い用のソファベッドや、出産後の赤ちゃんの管理のためのベッドも備え付けられており、母親の目の届く範囲で全て行われるため、安心できる環境が整っていると感じた。帝王切開にも対応できるように手術室が2室も完備されており、診療所とは思えない規模で驚いた。同時に出産になってもお互いの部屋が見られるようにガラス窓になっており、病室と同じフロアにあるため、緊急時も素早く移動でき動線作りが素晴らしいと思った。また、出産の際に使用する子宮内圧を測る器具やエコーなどで赤ちゃんの心拍や血流などが測れない際に用いる器具を初めて知り、その使い方の説明を受け、非常に勉強になった。もう一つ印象的だった点が、沖縄や横須賀など他の病院との連携をとっていることだ。海軍所属であり、岩国にずっと留まるのではなく他の基地へ行くこともあり、カルテなどを連携し情報のやりとりを行っていた。様々なリスクを抱える患者さんにとってはそのような密なやりとりが安全な出産にとって必要不可欠だと改めて思った。

・内科では、日本と違い、自由診療のため、お薬の料金も説明していることが印象的でした。アメリカと日本で同じ治療薬もあれば、日本ではあまり使われていない薬剤もありとても興味深かった。また、問診をとても丁寧にされ、生活指導も熱心にされていた。

・内科の問診では、スタッフと医師が問診前に情報共有を充分にしていたことが印象的でした。医師からも看護師に問診前に聞いてほしいことなど必要な情報を共有していることを将来自分も取り入れようと感じた。

・診察の中で、日常生活のことや雑談などフランクな会話から入ることで患者の本音や少し気になっていた身体の症状などを引き出し、より患者さんに密接な医療を提供できているように感じた。患者の本音を引き出すために、今後の診療に活かしていきたい。他の医療機関に搬送される場合には英語ではあるものの言語の壁があり患者は不安を感じる場面も多い。今後、外国の方の診療に携わる機会ではより不安に配慮していくよう精進したい。

・整形外科では、1人の患者を2人の医師が協力し、問診・診察を進めていく形式がとられており、疑問点等を共有しながら診療にあたる姿を拝見し、チーム医療の重要性を再認識した。1人の患者に20分ほど時間をかけ、患者が治療方針などを決定する際には、医師が一度席を離れ考える時間を設ける状況を多々拝見し、より患者に寄り添った医療の形だと感じた。また、これから世界の医師たちと自分が学んだこと、疑問点を共有する際に英語という共通言語を用いることが重要であると感じた。患者に治療を説明する際には、論文やガイドラインなどから具体的な数字を用いてわかりやすく図示しながら説明していくスタイルは万国共通の医療のあるべき姿であり、自分もこれからの日々の診療にとりいれていこうと思う。外国の診療スタイル、医療システムを経験することができそれらの良いところを日本での医療に役立てたい。また、メディカルスタッフ同士の距離が近く、相談しやすい環境で、気軽に医局に顔を出し、コンサルする場面は特に印象的で、認識の相違などをなくすためにはface to faceでのやりとりも良い策だと思い、これから活かしたい。

・精神科の外来では、Nurse Practitioner (NP)の方が、日本には馴染みのないポジションで、日本の看護師業務に加えて、患者の話を聞いて薬剤調整や医師以外で処方をしている点は日本と異なり新鮮でした。また、症状が安定してきた患者の電話診療が認められ、電話診療の結果から処方薬の調整を行うなど、診療の形態としてしっかり認められている点に違いを感じた。精神科医の診療までは必要ないと患者が感じるような場面でスクリーニングのような形でカウンセリングが勧められたり、精神科医の診療が数週間に一度しかない場合にオンラインでカウンセリングを毎週のように受けられたりと、スタッフの数が限られている中でも、不安や精神的な悩みに対応できる体制が整えられていることなど、細やかな対応について学べ、勉強になった。

・米国の家庭医療のコンセプトとして”Womb to Tomb”（子宮から墓場まで）というものがある。家庭医療は出産から看取りまで人の一生全てを診る。この考えは特に米軍基地では重要とされている。また、医療用麻薬が積極的に外傷などの疼痛コントロールに対して使用され、無痛分娩を一般的に行う体制が整えられていた。このような日本との違いがある一方で医療安全など日本と共通なものもあり、海外での医療の様子を垣間見ることができ勉強になった。

・「Family center medical home」は、総合診療科の家庭医のような役割をしている部署で、「WOMB to TOMB」ということわざを教えていただいた。日本語では「ゆりかごから墓場まで」ということで、まさに様々な年齢の方の様々な主訴に対応され、本当にその言葉を実行されていると印象に残った。また、様々な基地への配属があるため、引越しが多いというのも特徴的で、カリフォルニアに引っ越した方へ電話で問診をされていたことは印象的でした。驚いたのが、診療所でありながらもたくさんの診療科や医療設備がそろっていた。かかりつけの役割を持つ診療所が、基地の中にあることで、特殊な環境下でも安心して生活できるのだと感じた。

